

魚住町中尾住吉神社の歴史文化遺産

魚住町中尾の住吉神社は、屏風ヶ浦(林崎漁港の西の林崎辺りから松江、藤江、八木、江井島、中尾を経て二見までの屏風を立てたような 10m を超す切り立った海食崖)海岸の西端の丘陵地に建ち、播磨灘を一望できるとともに、瀬戸内海から見ると、神社のある丘陵は昔から航行する船の目印にもなったことがうかがえます。



○神社の由来

明石市内には、明石の土地柄から海との関わりのある神社も多くあります。魚住町中尾の住吉神社は市内の西部にあり、他の 10 社の住吉神社の中心的な存在で、祭神は住吉三神「表筒男、中筒男、底筒男」と神宮皇后を祀っていて、全国の住吉神社と同じように神宮皇后伝説と深く絡んでいます(『あかし文化遺産 明石市内に点在する文化財を調査・解説』)。この伝説は、神功皇后が三韓出兵した際、播磨灘で暴風雨に遭い、ある海岸に上陸し神籬(神の依りしろ)を立て、住吉大神に平穏を祈願したところ、悪天候がたちまちおさまり九州にむかうことができ、これに付属する地名伝説として、この時、神功皇后の衣を松の枝に掛けたところ、風にたなびいて錦のように美しかったので、「錦ヶ浦」と名付けられた(『新明石の史跡』)というものです。

また、本殿北の藤棚の由緒を書いた看板には、「古昔摂津の堺に祀られた住吉大神があるとき『播磨の国に渡り住はむ、藤の枝の流れ着いたところに我をいらい祀れ』とお告げを出された。そこで藤の大枝を切って海に浮かべた。藤は当地方に流れ着いたので・・・お祀りされました。・・・住吉大神はお祓いの御神徳を有せられる神様であり藤は住吉大神の神木であります」と記されています。5 月には美しい藤が咲き人々が集まります。



○中尾住吉神社の歴史文化遺産

南の海岸、魚住港から崖を少し登り、鳥居から北を見ると松が左右に生えた参道の向こうに山門、楼門、能舞台、拝殿と一直線に見通せます。

山門をくぐると正面に豪壮な二階づくりの楼門(市指定)が見えます。慶安元年(1648)に建立された建物です。楼門の両脇の石造狛犬がこちらを睨みつけています。楼門内には、木造狛犬1対と随神像1対があります。

楼門をくぐると能舞台(市指定)があります。市内に残る唯一のもので、初代明石城主小笠原忠政が建立、寄進したといわれ、能が地方にまで伝播した江戸時代当時の生活文化と歴史の変遷を知る資料として貴重です。本舞台へつながる橋掛かりには古いひな人形がたくさん展示(3月)されていました。毎年5月1日には能・狂言が奉納され、節分には能舞台から豆がまかれたり、あじさい祭りでは踊りが披露されたりして、能舞台が様々な行事に使われています。

秋祭りには拝殿と能舞台の間で神輿や屋台が担がれ賑わいます。拝殿の北には四社が横一列に並ぶ本殿があり、春日造りでできています。拝殿内には天井から吊るされた大和型船模型(市指定、江戸時代)、神馬図絵馬(県指定、江戸時代 円山応挙筆)模写、加茂競馬の図(市指定、江戸時代 石田遊汀筆)の文化財が展示されています。また探訪時(3月)は古いひな人形がありました。文和四年(1355)の銘のある石造灯籠(県指定、室町時代)は、現在は境内には無く、別のところに保管されているそうです。



【参考文献】『明石の文化財』(明石市文化振興課文化財係 平成 31 年) 『新明石の史跡』(あかし芸術文化センター 1997 年) 『あかし文化遺産』(明石市地域文化財普及・活用事業実行委員会・明石市 平成 27 年) 他